

世の中には、「カトリック教会は人間の罪意識を強調する傾向がある。」と  
 思っている人たちがいるようですが、信者の皆さんはどう思われますか。多分、言いに  
 くいと思いつつも、それに同意する信者も多数おられるでしょう。特に「赦しの  
 秘跡」をめぐっては、「どうして、教会は罪の告白を強いているのか。」という不平  
 も心の中に生じるかもしれません。そこで、今日はイエス様の福音の御言葉から、  
 「赦しの秘跡」についても少し考えてみたいと思います。

そもそも、今日の福音は三つの例え話となっていますが、「聖書と典礼」には二  
 つの例え話だけが書いてあります。その三つの例え話に、それぞれ「見失った  
 羊」、「無くした銀貨」、そして、「放蕩息子」というタイトルが付けられていま  
 すが、それらはいずれも、ある特定の人たちに向けられています。それは「徴税人  
 や罪人が皆、話を聞こうとしてイエス様に近寄ってきた」時、それを見つめながら  
 「この人は罪びとたちを迎えて、食事まで一緒にしている。」と不平を言いだした  
 「ファリサイ派の人々や律法学者たち」でした。彼らは律法に基づいた「義人」、つ  
 まり罪のない人たちとして認められていましたが、イエス様はその偉い人たちに聞か  
 せるためにこれらの例え話をなさったわけです。その全体的な内容を鑑みたら、イ  
 エス様はその人たちに、まるで「あなたがたは天の喜びに与ることができない。」  
 とおっしゃっているようです。その喜びとは、見失った一匹の羊を見つけた羊飼  
 とその仲間たち、また、無くした一枚の銀貨を見つけた女とその仲間たちにしか味  
 わえない喜びでしょう。その喜びとは、自分を悔い改めて慈しみ深い父親の家に  
 戻って来た放蕩息子とその父親の喜びであり、また、その息子を喜んで迎え入れた

ひとたちだけの喜びよろこに違いありません。その一匹いちびきを捜し回まわっていた羊飼ひつじかいも、また、一枚いちまいの銀貨ぎんかを捜さがしていた女おんなも、そして、その放蕩息子ほうとうむすこを待ちに待まっていた父親ちちおやも、決して迷まよった羊ひつじや転ころがった銀貨ぎんか、また、身勝手みがってな放蕩息子ほうとうむすこを責せめませんでした。ただ、見みつけたものをもっと大事だいじにし、帰かえってきた息子むすこを憐れみあわ深く抱ふかいてくれただけです。彼らかれにとって、「なぜ、群れむから離はなれたのか、なぜ、無なくなったのか、なぜ、家いえを出でたのか。」などの追及ついきゅうは、もう意味いもないことだったでしょう。大事だいじなのは、「見みつけたこと、かえってきたこと、生きていたこと」だけだったのです。それが、慈しみいつくと憐れみあわに満みちておられる神様かみさまの御心みこころであり、イエス様さまは今日きょうの福音ふくいんを通とおして、その愛あい深い姿すがたを示しめしてくださったわけです。

一方いっぼう、今日きょうの福音ふくいんの主な聴衆おもであるファリサイ派ちようしゅうの人々はや律法学者ひとびとたちは、「放蕩息子ほうとうむすこ」の例え話たとに登場ばなしする兄とうじょうであることが分わかります。兄あにはどうしても自分じぶんの弟おとうとと父親ちちおやを理解りかいしたくなかったのでしょう。特に、父親ちちおやに対しては、強たくい恨みたいとつようらの憎しみにくを持っているように見みえます。そういう心こころを持もっていたら、父親ちちおやとの親密しんみつな絆きずなが築きずけるはずがありません。それどころか、日々ひびの生活せいかつの中で不なか満ふまんと不平ふへいを心こころにつのらせ、父親ちちおやと共ともにいることは彼かれにとって耐たえられないことだったに違ちがいありません。言い換いえれば、心理しんりてき的に父親ちちおやの家いえを離はなれてしまったのは、兄あにのほうだったかもしれません。結局けっきょく弟おとうとは家いえに帰かえって来きましたが、兄あには家いえに入はいろうとしませませんでした。それこそが彼かれの本心ほんしんだったでしょう。残念ざんねんなことに、ファリサイ派はの人々ひとびとや律法学者りっぼうがくしゃたちは律法りっぼうの厳きびしさに拘こたわり、それよりもっと大事だいじな慈しみいつくと愛あいからは離はなれてしまっていたのです。

イエス様は今日の三つの例え話を通して、わたしたちが神様の慈しみと愛に立ち返ること、つまり、悔い改めることの大事さを教えてくださいました。そして、わたしたちもその慈しみと愛を喜び分かち合うことができる人となることを望んでおられます。興味深いことに、今日の三つの例え話のタイトルは、「見失った羊」と「無くした銀貨」、そして「放蕩息子」です。その中で先の二つは、まるで、誤って羊飼いが羊を見失い、また、女が銀貨を無くしたように見えます。一方、「放蕩息子」の例え話は、その息子自身の過失に思えます。でも、見失った羊と羊飼いは、無くした銀貨と女、放蕩を尽くした息子と父親は、結局、それぞれの絆を回復しました。その絆を回復すること、また、強めること、それが「赦しの秘跡」のポイントです。

そもそも、罪とは神様との絆を損ねたり、阻んだりするものなのです。過ちや習慣的な咎なども、それを繰り返すことによって神様とのきれいな人格的關係にひびが入り、結局、神様への心を鈍くしてしまいます。その結果、神様の子供という特別な恵みは失われ、自分も知らないうちに、荒れ果てた野原のような世の中でさ迷う一匹の羊となり、父親の家から離れた憐れな子供となるわけです。赦しの秘跡は、わたしたちに与えられた神様の恵みを思い起こしつつ、それをどれほど大事にしてきたのかを顧みることから始まります。そして、自分の罪や過ちを素直に認めて神様からの赦しをいただき、神様と共に互いの絆を回復し、また、それを強めるのです。その神様との和解の喜びこそが、赦しの秘跡の賜物であり、その賜物によって、隣人に向かう愛も深まるでしょう。これからも、赦しの秘跡をためらうことなく

受け、むしろ、それによって、<sup>しんじゃ</sup>信者の<sup>みな</sup>皆さんと<sup>かみさま</sup>神様との<sup>きずな</sup>絆が<sup>つよ</sup>強められるよう、<sup>いの</sup>お祈りいたします。